

活動内容：国際学会での発表

Effects of Iron-containing Materials on Reducing Paddy Rice Root-rot and Suppressing Methane Emission with Dry Sludge Application

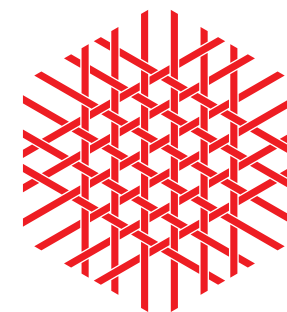
日下 華（博士前期課程1年）

渡航先：フィリピン・マニラ

ISSAAS International Scientific Congress and
General Meeting 2023 (2023/11/8-11)

国際稲研究所 (IRRI) 見学

11月8日から11月10日にISSAASに参加しました。今年のISSAASでは、「東南アジアの農地の統合管理」が大きなテーマとして掲げられていました。そのため、様々なバックグラウンドの方が集まっており、農作物だけでなく、農薬の正しい使い方の普及法や加工品の製造法、家畜の運用など多様な分野に触れることができました。質疑応答の時間には、研究者どうして幅広い視点から意見交換が白熱する場面も多く、興味深かったです。私自身のポスター発表にも、多くの方が質問して下さいました。「研究に用いた肥料に毒性はないのか」など、作物生産の上で忘れてはならない事柄を思い出させてくれる質問もあり、第三者目線で改めて研究内容を振り返ることができました。私は今回のISSAASが初めての海外の学会参加でした。全体の簡潔なまとめや想定される質問への回答はもちろん、簡単な会話も用意して臨みました。しかし実際会話をしてみると、質問が聞き取れない、答えが上手く伝わらないといったことが何度もありました。机上で学んだつもりになっていましたが、実践としてのコミュニケーションにはまだ課題が多いことを思い知り、悔しい気持ちと同時に英会話習得への意欲が沸きました。また、1日目・2日目ともに夜には参加者全員での食事会があり、地元の大学生のパフォーマンスや、国ごとに出し物をする機会などがありました。国内の学会では経験したことのない歓迎を受け驚くと同時に、このような機会があることで違う大学、違う国の方との会話のハー



東京農業大学
農芸化学科

ドルが下がり、学会中の議論の活性化に繋がるのだと感じました。

11月11日には、国際稲研究所 (IRRI) の見学を行いました。IRRI では、International Rice Genebank や研究室、広大な圃場の見学をしました。International Rice Genebank は膨大な量の種子を保存している巨大な冷蔵室でした。「この種の種子が欲しいと思えば手に入る、言わばコンビニのような場所だ」という職員の方の言葉に、その規模の大きさを実感しました。研究所には、最先端の分析機器など様々な機器が揃っていましたが、研究員の方が手作業で行っている工程も少なからずあり、大きな研究所であっても手作業は多く必要となることに驚きました。圃場では、一年を通して温暖な気候を活かして日本では珍しいコメの連作を行い、栄養分の過不足や温室効果ガスに関する研究を行っていました。圃場では、10年単位の長期的な観測がされており、ラボスケールとは桁違いの研究規模に圧倒されました。

今回の学会を通して、英語を通してのコミュニケーションの難しさを改めて思い知りました。しかし、不自由な言語であっても言葉を漏らさず聞き取る努力、そして伝える意思を持つことが最も重要だということ新たに学びました。英語を話すことへの苦手意識がなくなったことは、今回の経験における大きな成果だったと感じています。